
 〈書評〉

津山直一（国立身体障害者リハビリテーションセンター）〔監修〕

標準リハビリテーション医学

上田 敏・大川嗣雄・明石 謙〔編集〕

砂原茂一（国立療養所東京病院）

リハビリテーション医学の本はいぶんどい。少なきに悩むというよりも多きに迷うというのが実状であろう。しかしそれらの多くは、どちらかという新しい分野への知的好奇心や差し当っての臨床上の必要性に対応するという種類のものである。そろそろ物珍しさ、間に合わせの域を脱して、内科とか整形外科とかの伝統的科目とならんだ、一般臨床家が誰でもその自己形成の道程で通過しなくてはならない、1つの基礎的臨床科目としての落ちつきを備えた教科書的な書物が出現してもいい時期ではないだろうか。

そのような機運あるいは期待に応じる形で現れたのはこの津山さん監修の“標準リハビリテーション医学”だといっていいいであろう。もっともいざそのような標準的教科書を作るとなると改めてリハ医学の学問としての若さを思い知らされることになり、上田さん、大川さん、明石

さんたち実際編集の衝に当たった方々の苦勞がしのばれるのである。どういう項目を選び、どのように排列し、どういう人に執筆を依頼し、それぞれの項目にどれほどのページを配分するかということから困難が始まったに違いない。その上編者たちは教科書らしい正統派的体系を作り上げようとする野心を抱いたようである。この本と直ちに対比することが適当かどうか問題だが Rusk や Krusen の handbook 類を見ても各項目羅列的で、しかもその排列の順序は随分恣意的である。それに比べ、本書は序説にはじまり、リハ医学の基礎医学、リハ医学の臨床総論、臨床各論と大変整然とした構成を誇示している。もちろんいくらかの無理を承知の試みには違いないが医学生や研修生の頭の整理には便利であろう。

内容についていえば、必ずしも過不足なしといえず、いくらかの個人

的深入りが無いともいえないが概して公平な教科書的節度を保っているし、リハ医学の書物としては当然だが、小じんまりした書物としては表や図がふんだんに用いられていることも読者の理解に便利であろう。項目としては癌はともかく老人のリハの一章がほしかった。

今日の実状をつまびらかにしないが、まだ各大学でのリハ医学教育の時間やレベルがマチマチのようだから、医学生や研修医の諸君が本書によって標準化されたリハ医学の知識一般を自分のものとされるのにはまことに手頃な一冊というべきであろう。

標準的でありながら up to date の目配りをというのはどのような科目についてもそうであろうが、とくにリハ医学の場合たやすいことではないであろうが、そのためには版を重ねるごとに内容の取捨と表現の工夫を期待するしかない。そのための出発点として、日本のリハ医学教育史上における本書出現の意義は決して小さくないにちがいない。

（B5，頁350，図172，写真186，
¥5,900 円300 1986 医学書院 刊）